



みやぎ霊園

ESSAY

～霊園に仙台ゆかりの
人をたずねて10～

大谷 亘 (1935～2013)

秒刻みのラジオ制作の現場から、
リスナーに語りかけ音楽を届けた。



関東圏に住んだことのある人だったら、「大谷亘」という名前に、ラジオから聴こえてきた落ち着いて上品な話しぶりを思い起こすかもしれない。ああ、あの「ラジカン（ラジオ関東）の大谷」かと。

大谷亘さんは、ラジオ関東（現アール・エフ・ラジオ日本）の番組のパーソナリティとして人気を博した人だった。自らの名前を冠した「大谷亘のここに歌あり」は1989年から13年続いた長寿番組。ほかにも「大谷亘の歌ひろば」「大谷亘のホットライン」など、パーソナリティの存在を強く打ち出した番組が続いたことに根強い人気うかがえる。

中学に入学した頃にはすでに放送界へのあこがれを抱いていたようだ。「友人と電話で話すと、最後には『担当は大谷亘でした。NHK』なんてやってましたからね」と弟の庸さんは当時を振り返って笑う。しかし、鉄道省の役人だった父親は長男の亘さんに堅実な道を歩むことを強く望んでいて、口癖は「東大へ行け」。そんな厳格な父への反発が、自由な仕事へのあこがれをさらに強いものに育てたのかもしれない。青山学院大学時代には放送研究会に籍を置き、テレビ局でドラマのアシスタントを務めていたという。

大学卒業後は、アナウンサーとしてNHKの採用が決まったものの、長男として地方勤務があることを案じ、また制作への思い断ち難く、悩んだ末に辞退してラジオ関東に入局しラジオの制作畑を一筋に歩んだ。

西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)。

歌謡番組のチーフディレクターを務め、ときにはスクリプターとして詳細に構成を詰め自ら脚本も書いたという。当時、ナレーターとして活躍していた芥川隆行氏に出演を依頼して人気番組に仕立て上げ、のちには芥川氏の後任としてこの番組のパーソナリティとなった。ゲストとして招いた歌手は、北島三郎、五木ひろし、石川さゆりなど大物ぞろい。ゲストから面白い話を引き出しながら、気に入ったレコードをかけ、穏やかな語り口でリスナーに話しかける番組は、さらに幅広いファンを獲得していく。みずから作詞も手がけ、新人歌手のオーディションの審査員をつとめ、ブレンダー・リーをはじめ外国の歌手へのインタビューも試みている。スタジオこそが生きる現場。秒単位で進む制作現場の緊張感をこよなく愛した生涯だった。

一方で、兄弟への思いも厚かった。「子どもの頃ははじめられるとかばい、お菓子が一つしかなければ分けてくれる。しょっちゅうごちそうしてくれて、定年になってからも寿司屋に招いて好きなもの食べろって。年金暮らしの兄は、自分は安いもの注文しながら。悪かったなあ(笑)」と庸さんは優しく兄を思い起こす。“兄弟仲良く”は父の教えだったそう。反発をしていた父の教えをある面では忠実に生きたといえるのかもしれない。

実は、大谷亘さんは仙台との縁はない。庸さんご夫妻が外国暮らしを経て、終の住処を奥さんの故郷の仙台に求めたとき、墓所も定めて亘さんに入ることに決めたのだ。「知らない土地だけれど、一生スタジオの中にいたんだから、ここも似たようなものだよ、といってくれるんじゃないかな」と庸さん。いずれ夫婦で大好きな兄といっしょに眠ることに決めている。享年78歳。

(取材・文／西大立目祥子)



工作中的スナップ。墓地は21区。